

第 60 回 オミクロン株について（新春学長メール Vol.6）

おはようございます。
長崎大学人、河野茂です。

本日は、熱帯医学研究所臨床感染症学分野の有吉紅也教授による解説です。
なかなか先の見通しが見つからない現状ですが、専門家の最新の知見を把握しておきましょう。

現時点での新型コロナウイルス感染症流行の状況と見通しについて
～オミクロン株をどうとらえるか～

新型コロナウイルスの新たな変異株「オミクロン株」による流行は、これまで私たちが数理モデルを用いて解析してきたアルファ株、デルタ株といった一連の変異株の延長線上には位置しない、総じて別次元の感染性を獲得したウイルス株に見える。

同じタイミングで同じ対応を繰り返すだけでは、第 5 波の感染者数をはるかに上回る流行になる。

最も大きい要因は、社会生活を戻すための切り札であったワクチン効果からの回避である。私たちのモデルでは、デルタ株に対する予防効果を 8 割以上に設定していたが、ブースター接種が普及していない現時点でオミクロン株のそれは良くて 3 割程度まで想定を下げざるを得ない。

二つ目は、ウイルス自体の伝播力がおそらくデルタ株の最大 2 倍程度に増大したことだ。これまで日本は、都市封鎖やワクチン以外の介入で、何度も流行拡大局面を反転させてきたが、オミクロン株に対しての効果は未知数だ。

三つ目は感染者数が倍になるまでの世代時間（感染者が次の感染者を生み出すまでの時間の平均）が大幅に短縮した点である。

デルタ株の 0.45 倍になったという最新の報告がある。これは、オミクロン株の感染者数がほぼ垂直に増えるもう一つの要因である。

潜伏期間が短縮したことに加え、仮に軽症感染者の割合が増えているとすると、接触者の隔離対策自体の有効性が損なわれる懸念がある。

そうなる唯一確実な対策手段は、ブースターワクチンと（普段接触していないひととの）

接触回数を減らすことであり、結局、思い切った社会・経済活動の制限が余儀なくされるだろう。

一方、オミクロン株による重症化率がデルタ株に比べて低いことも事実である。英国で入院患者の割合は、デルタ株の 3 割程度という報告もあるが、感染者数がそれ以上に増えると重症者・死亡者の数も増える。今後、社会としてどの程度まで感染拡大を許容するか見極める局面も出てくるだろう。その議論を深めるには、なるべく早い段階でオミクロン株による重症者数の信頼性の高いシミュレーションを早く確立させることだ。

他方、社会・経済活動には極力制限をかけずに乗り切る方向に舵を切った英国における医療現場は、重症患者の急拡大よりも先に、欠勤による深刻な医療スタッフ不足が顕在化した。

以上のようにオミクロン株は、新型コロナウイルス感染症流行に新たな様相をもたらそうとしている。

よって、私たちの受け止め方、また対策においてもこれまでの延長・拡大にとどまらず、オミクロン株の特性を踏まえたうえで、新たな With コロナ社会の未来像を描き直す準備を始める時期に来ている。

文責

有吉紅也

有吉先生、ありがとうございます。

オミクロン株の重症化率はデルタ株に比べて低いことは事実であるようですが、感染者数の急速な増加がもたらす様々な影響は、これから注視してゆかなければならないようですね。

我々としては、冷静に平常心を保ちながら日々の仕事に集中したいと思います。

<平常心><道><基本><継承>というテーマの皆さんからのメールも、まだまだお待ちしております。

さあ、今日も、前を向いて進もう。